



左から、梶田正文院長、山田育男副院長、小田部昭氏

碧南市民病院のセキュリティシステムを語る

教育を通じてスタッフの意識改革を起こし、セキュリティポリシーの徹底を実現

Security Report

碧南市民病院は、個人情報保護が騒がれる以前から情報システムへのセキュリティ対策を講じている。新界においてその成果は大きく評価されているが、現在でもたゆまず対策は進化を続けている。同院の、梶田正文院長、山田育男副院長、そしてセキュリティシステム導入をサポートしてきたNECフィールドングの小田部 昭氏に、その取り組みの経緯とポイントを聞いた。

世の中に先んじて取り組み始める

——セキュリティへの取り組みについてお聞かせください。

梶田 当院は、1988年5月の開院当初からコンピュータシステムを導入しています。その後、2002年にシステムを更新し、09年2月には電子カルテを稼働させました。セキュリティに関しては、02年のシステム更新を機に、セキュリティポリシーの作成などの取り組みを始めました。

セキュリティポリシーを設定する上では、セキュリティがなぜ必要か、職員意識を変えることがポイントでした。使う人間にセキュリティの意識がなければ、どんなシステムも機能しませんからね。

山田 最初は、なぜこんなに制限され



碧南市民病院

所在地：愛知県碧南市平和町 3-6

病床数：320床

URL：<http://www.city.hekinan.aichi.jp/HOSPITAL/>

るのか、という意識もありました。当時は、学会でも個人情報を出さなければ認められない時代でしたからね。
小田部 病院内では医師も看護師も忙しく、セキュリティどころではないのが実情です。ですから、システム更新という大きな区切りのタイミングで取り組み始めたのは、正解でしたね。

持ち出し制御で大きな効果を上げる

——システム面と院内の環境面における対策についてお聞きします。

梶田 02年のシステム更新時に、暗号化と、FDやUSBメモリによる情報持ち出しの制限を行いました。特に持ち出し制御と暗号化の効果は大きく、不正な持ち出しを防げます。

小田部 世の中が「個人情報って何？」と言っていた時代に、ここまで取り組まれたのは画期的だと思います。

梶田 個人認証については、09年に静脈認証（静紋）を導入しました。パスワードのように定期的な変更も必要なく、認識率も高いので快適です。



↑「セキュリティ対策は人の教育がポイント」と語る梶田正文院長

山田 なりすましの問題については、静脈認証で大きく改善されましたね。ただ、現状のシステムでは、権限を細かく設定すると、医師の仕事が増えてしまうという一面もあるので、医療秘書を雇用することで解決しています。

小田部 医師の方々の仕事は多いので、意識せずにセキュリティが確保されていることが大事だと思います。

梶田 ウイルス対策については、02年からウイルスバスターのコーポレートエディションを導入しています。また、病院情報ネットワークとインターネットは完全に切り離しています。

山田 最初はセキュリティの強化に反発もありましたが、対応が必要だということが次第に理解されてきました。

小田部 スタッフを対象に実施している講習会の出席率が80%以上なのは、立派なことです。皆さん、忙しい業務の合間に、一所懸命勉強しています。

病院に求められるセキュリティ

——企業のセキュリティとの大きな違いは何でしょうか。

梶田 キャリアパスの上で、個人情報



↑「セキュリティは継続して守り続けることが大事」と語る山田育男副院長

の取り扱いが欠かせない点です。医師は病院が変わっても、専門医や認定医になる上で症例を蓄積する必要があり。自分の扱った症例を退職後に見られないというのでは困るのです。

小田部 病院は企業と違って、個人情報がユビキタス状態で存在しています。同時に、アカデミックな領域でも個人情報が使われています。個人情報保護法は民間向けの法律なので、医療界でそのまま使うには不便利です。現状ではグレーゾーンが残っていますし、それが無いと医療が止まってしまうという現実があります。

——地域連携についてはどのようにお考えですか。

梶田 開業医の皆さんと話をすると、まだ個人情報の重要性が伝わっておらず、これからという印象です。今後は開業医の皆さんへの啓もうが必要でしょう。一方で、患者側にも「全部お任せ」という人が多く、同意を取りに行っても「何の話ですか?」という感覚です。これは今後の課題ですね。

小田部 医療は医療者と患者との信頼関係で成り立っています。絶えず意識

→09年に個人認証用として静脈認証システム(静紋)を採用。パスワード管理による煩わしさもなく、快適な運用を実現



を持って接すれば、医師や看護師の方々の姿勢が患者にも伝わっていくと思います。

梶田 現状では、結局基幹病院への負担が大きくなっています。しかし、諦めたらセキュリティは向上しません。

今後も教育に力を注いでいく

——NECフィールディングの果たした役割はどういったものでしたか。

梶田 セキュリティとは何か、ということを一から教えてもらいました。だからこそセキュリティポリシーの制定が可能になったのだと思います。セキュリティポリシー策定に関しても、病院でのノウハウを生かした支援を頂き策定することができました。暗号化や持ち出し禁止などのシステム上の対策はもちろんですが、スタッフへの教育に関しても、研修テキスト作成から講師派遣まで、全面的に協力してもらっています。現在、約450台の全端末について、操作監視、ネットワーク監視、持ち出し禁止、暗号化、静脈認証の機能を備えており、ハードウェア的

なセキュリティ対策についても、適切な設計支援を頂き、安心して運用できるレベルに達することができたと考えられます。

——セキュリティを高めていくためには、何が必要でしょうか。

梶田 やはり、利用者である人間の意識を変えていくしかないですね。

小田部 セキュリティの向上は「これだけはやりましょう」という具合に進めないと、うまくいかないと考えています。最初から「あれもこれも」では、実行する前に挫折してしまいます。

梶田 個人情報保護法から入っていくと窮屈なので「セキュリティとは何か?」という視点から入った方がいいように思います。当院の場合、それが成功の秘けつだったと思います。

小田部 個人情報を使うことがだめだというのではなく、個人情報を生かしていくことが大事です。使い勝手のよさ、共有すること、安全にすること。この3つのバランスが大切ですね。

山田 現在の課題は、定期的な監査を行い、問題点を洗い出していくことだと考えています。情報を継続して守り続けることが大事ですから。

梶田 セキュリティ対策はコスト的にも大変ですが、今後の病院運営上、避けては通れない課題です。最もローコストでリターンが大きいのは、やはり人の教育でしょうね。

セキュリティ対策は、コストの前に信頼のおけるパートナーが大事だと考えます。当院の場合はNECフィールディングであったということです。